

# 燈 光

3

# 令和2年の灯台記念日関連行事に取り組んで

「コロナ禍で活動した関係者の思い」

とよまの灯台倶楽部代表 小野陽洋



## ◆はじめに

燈光読者の皆様はじめまして。

私は、とよまの灯台倶楽部の代表を務めております小野陽洋と申します。

まずは、「何々、とよまの灯台？」に疑問を持たれるかと思いますが、福島県いわき市薄磯（うすいそ）の岬にそびえ立つ塩屋埼灯台は、古くから地名の「豊間」にちなみ「とよまの灯台」と呼ばれ親しまれてきました。

次いで「倶楽部？」についてですが、この倶楽部は、塩屋埼灯台の持つ様々なコンテンツを、歴史と文化を伝える資源、観光を促進する資源



【執筆者集合】

左から、小野陽洋、小野季子、  
緑川健、坂本博紀

として活用し、地域に元氣と活力を与える活動を行うことを目的に、昨年9月に産声を上げたばかりのグループで、地元の有志、燈光会塩屋埼支所、福島海上保安部の3者間のネットワークの役割を担っています。

さて、昨年は、申し上げるまでもなく、春先以降に急拡散したコロナ禍の影響で、灯台の参観も休止となるなど、灯台をテーマとする活動が見通せなくなりまして。

私達の倶楽部では、メンバーの多くが一昨年の点灯120周年を記念する様々なイベントを経験しており、当然のことながら、令和2年の灯台記念日においても、いわき市内外の多くの方に当地に足を運んでいただき、灯台と周辺の海辺や町並みを堪能していただきたいと考えていました。

重い空気に包まれるなか、国内各地で多くのイベントが中止や延期となっていることを踏まえ安全性を最優先に実現可能な方策を探った結果、灯台記念日から



灯台文化祭PRのチラシ

文化の日までの3日間、過密となる場面を作らず、ゆったりと灯台へ足を運んでいただきながら美しい眺め、各種の展示を堪能していただく催し物、そして、感染対策としては万全なオンラインを活用して地元ゆかりの音楽、踊り、食、地域活動を紹介する「オンライン灯台フェス」を網羅した「とよまの灯台文化祭」を実施しました。

例年のように、来場者数をイベント成功の指標にはせず、緩やかに感染対策に配慮しながら会場の対応に当たりました。

お陰様で、期間中どうか天候にも恵まれ、来場された方々へ、僅かかもしれませんが気持ちの癒しに繋がる空間を提供できたものと振り返っています。

ここで、日々の燈光会塩屋崎支所勤務の中で灯台への来訪者とふれあい、また、これまでの灯台記念日の特別行事を見つめてきた小野季子氏、今回の行事で2つの大きな目玉となった、灯台と周辺地域の歴史を貴

重な写真や絵葉書で伝える「塩屋崎特別資料展」を主催した緑川健氏、初めての挑戦でもあった「オンライン灯台フェス」の全体を監修した坂本博紀氏のそれぞれのメッセージを紹介させていただき、コロナ禍という特殊事情の中で敢行した記念行事の様子を感じとっていただければ幸いです。

## これまでの

## 灯台記念日を振り返って

燈光会塩屋崎支所長 小野 季子

私は、塩屋崎支所に2010年(平成22年)5月から勤務しています。

皆様の中には、塩屋崎灯台で、直にお会いしたことのある方もいらっしゃるかと思えます。

さて、

私がこの灯台にお世話になってから10年ほどが過ぎましたが、これまでの灯台記念日を回想してみたいと思います。

私が勤務を開始する以前、灯台記念日では、灯台職員が中心となり、万国旗の掲揚など、普段とは違う祝賀ムードを演出しながら来場者を迎える記念行事が執り行われていましたが、燈光会職員は、特別休暇の扱いで行事には参加していませんでした。

ところが、私が通い始めた年から、福島海上保安部が企画した様々な催しと一緒に参加するようになりました。

当時は、夏に行われた灯台絵画コンテストに入賞した地元の子供達の表彰式、保育園児から灯台へのメッセージと花束の贈呈などが中心でしたが、万国旗が掲げられた灯台を背景に記念撮影をする方、この日を目当てに久し振りに訪れた方とゆっくりお話しをしたりすることもあり、いつもとは違い来場者と深く交流できると感じたことを今も記憶しています。

勤務を始めた翌年、2011年(平成23年)の3月には、東日本大震災によって、灯台と



全て破損した灯台ハリ板ガラス



崩壊した敷地



参観再開セレモニー

敷地のあちこちに大きな被害が生じたことから灯台参観は休止となりました。

ほぼ3年間にわたる復旧工事を経て、2014年(平成26年)2月に再開されましたが、長期間の休止の影響は大きく、この年以降の参加者数は激減しました。

一人でも多くの方に塩屋埼灯台を訪れて欲しい、灯台の仕組みを知り、踊り場からの眺めの素晴らしさ、そして、震災からの復興が進む地元の姿を見て欲しいとの思いを込めて、灯台記念日では、毎年、保安部職員が工夫を凝らした催しを行うようになりました。

記念日行事で定番となったレンズ磨き体験は、毎年、子供達に大人気、大きなレンズを

前に生き生きした表情を見せてくれます。また、夜間の灯台見学は、非日常的な体験が大好評でした。

ご承知の方も多いかと思いますが、この灯台は、ふもとの駐車場から灯台の正門まで約200メートルの急坂を登らなければなりません。

記念日のイベントに必要な展示物、配布物などは、人力での運搬となり一苦勞です。毎年、初秋から始まる準備、当日の対応などを通じて、保安部と支所の協力関係も深まって行きました。

そして、2019年（令和元年）、塩屋埼灯台は、大きな節目を迎えました。

1899年（明治32年）12月15日に初点灯し、過去の節目の年には、地元関係者も加わり盛大に祝福されてきたことが記録されています。

点灯日が12月半ばと言うこともあり、過去には、11月の灯台記念日に併せて祝賀行事が行われていたこともありました。

現在、東日本大震災を経て、灯台の周辺の街並みも大きく変化し、また、地元では生活復興への取り組みが最終段階となるなかで、120歳となる記念すべき年を迎えたのです。

福島海上保安部が声をかけ、地元の街づくり団体が

中心となり、120周年記念事業実行委員会が組織され、この中に、私たち支所も加わりました。

この年は、4月以降、春、夏に灯台でのイベントがあり、秋の灯台記念日を迎え、初の開催となる「海まち・とよま灯台フェス」が実現しました。

灯台への愛情の強い方々が一致団結したこのフェスでは、特設ステージでの音楽演奏、伝統芸能、地元高校生によるフラダンスなどの披露、様々な食を堪能できる出店、灯台内部での映画祭など、震災以降、初めてづくしの大盛況で、たくさん笑顔があふれる一日となりました。

このように、今までに無かった新しい工夫が盛り込まれるようになり、主催者も来場者も楽しめる雰囲気が一気に高まりました。

こうした地元関係者が連携する良い環境が、翌年も続くと思っていました。予想もできなかったコロナ禍に見舞われました。

2020年（令和2年）の灯台記念日のことが話題にできるようになった夏の終わり頃、前年の活動メンバーが再結集する形で「とよまの灯台倶楽部」が生まれ「コロナ禍でもできること、今しかできないこと」を模索しながら、灯台記念日に向けて力を合わせて企画

と準備が進められました。

前年、ステージで盛大に行われた演奏などはオンライン開催へ変更するとともに、灯台絵画コンテストに

参加した県内全作品の灯台構内での展示、灯台倉庫内での歴史資料パネル展示などコロナ感染リスクを排除した「とよまの灯台文化祭」の開催に至りました。

このように、支所勤務を始めてからの灯台記念日を振り返りましたが、いま強く感じていることは、「いつの時代も灯台を誰よりも愛し、その魅力を広く伝える熱い思いのある人々、陰で力強く支えて下さる多くの方々によって灯台記念日が支えられ、徐々に内容が充実し、これからも発展していくことに期待したい」と言うことです。

塩屋埼支所は、これからも、参観者の皆様に感動を伝える灯台記念日が実現できるよう、灯台倶楽部の一員として頑張っていきたいと思えます。



灯台絵画コンテストの作品展示の様子

## 塩屋埼特別資料展を主催して

地元学研究者・小泉屋文庫主宰 緑川 健

私は、いわき市四倉で、家業を営む傍ら、郷土の産業、海運、漁業、鉄道等の発展の歴史、教育や文化の発展に力を尽くしてきた人物の足跡などについて、資料収集、調査研究、地元紙へのコラム寄稿などを行う「地元学研究」を日々続けています。

さて、私が、塩屋埼灯台のイベントに関わるようになったのは、平成31年1月、地元にゆかりのある映画を通じて地域の歴史と文化を発信する活動の一環で、灯台守とその家族の生活を描いた名画「喜びも悲しみも幾歳月」を上映したことです。

その催しの準備で何度となく灯台へ足を運ぶうちに、福島海上保安部、燈光会支所及び地域の町おこしの関係者との関りが深まったことでした。

その年は、点灯120周年で関連行事が幾つも催され、その一コマであった講演会では、「いわき市民に

とつての塩屋埼灯台」というテーマによって、これまでに自ら収集してきた地元の歴史等に関する資料などを披露しながら、私自身の灯台への思いを話す機会をいただきました。

講演会のあと、地元の方々から「今まで知らなかった話や映像に触れ深く感動した」などと感想をいただき、その時は何とも言えない達成感を覚えました。

このように、自分自身と灯台との距離がせばまっていく中で、令和2年9月に産声を上げた「とよまの灯台倶楽部」の活動にも自然な形で参加するようになりました。

さて、灯台記念日を前に、倶楽部では、コロナ禍でも感染を防ぎながら雄大な白亜の灯台と地域の魅力を発信するイベントがどうにかできないかについて、メンバー同士の真剣な模索が続いていました。

幾多の議論の末、11月1日の灯台記念日から3日の文化の日まで、3日間にわたって「とよまの灯台文化祭2020」を開催することになりました。

「文化祭」の名を冠したイベントとなった以上、単に灯台の装飾や、音楽の演奏、お楽しみコーナーだけではなく、やはり、灯台の持つ地元との関わりなどについても、古い資料や普段は目にできない映像を披露

すべきではないかとの意見に皆が賛同しました。

このような経緯によって、昨年の講演会のように、灯台周辺の歴史などを絵葉書や動画、銅版画絵図、観光パンフレットなどで紹介する「塩屋埼特別資料展」を私が担当することになりました。

暫くの間、どのような構成にすべきか思案し、次の4つのテーマで構成してみることにしました。

1つ目は、「初代塩屋埼灯台と2代目灯台」

竣工もない初代灯台の雄姿を映した絵葉書、灯台の雄姿を直近で撮影した珍しい写真、太平洋戦争の最中に灯台が米空母艦載機の機銃掃射をうけた痛々しい姿、灯台を背景に写真に写る人々の営み。初代と2代目の大きさの比較図などを展示することにしました。

2つ目は、「山村暮鳥と塩屋埼灯台」

初代の雄大な姿の灯台は文学面でも様々なモチーフになっています。

詩人山村暮鳥（1884～1924）は大正元（1912）年9月、日本聖公会の牧師として常陸太田講義所から平講義所に赴任してきました。

彼は、塩屋埼灯台に材をとった『岬』という詩を作り、その中で、灯台を1本の指にたとえました。

この作品の紹介については、いわき地域学會代表幹

事・吉田隆治氏に解説の寄稿をお願いしたところ、素晴らしい文書をご提供いただき、深く感謝したと思います。

3つ目は、映画「喜びと悲しみも幾歳月」

この映画は、当時、塩屋埼灯台長として勤務していた田中績（いさお）氏の妻きよさんが、夫と共に灯台で過ごした貴重な体験を綴った手記に木下恵介監督が目を止め、自ら脚色して制作された名作です。

前述しましたとおり、私が実行委員長を務めていた名画観賞の活動「イワキノスタルジックシアター」で、この作品を上映した際に用いた資料も展示することになりました。

そして、4つ目は「戦前戦後に発行された絵葉書・古絵図・観光パンフレット」

明治末期から昭和初期にかけて発行された絵葉書をパネルで展示、灯台周辺の薄磯、豊間、中之作（なかのさく）、江名（えな）の各地区の情景を伝える資料、灯台至近の豊間にあった「福島県立回春園（平成31年小名浜に移転した、国立病院機構いわき病院の前身）」や中之作漁港の古い写真、灯台をモデルにしたレコードジャケット、灯台が描かれたいわき市のマンホールデザインを並べました。

さらに、

明治38年に刻された銅版画絵図に

江名・豊

間・沼ノ内

の図も見つかったの

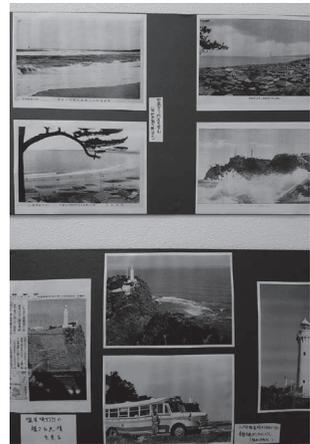
で、併せて展示することにしました。

いずれも、115年前の当時の地元の様子を伝える貴重な絵図です。

また、この4つのテーマの写真、図表に加えて、昭和11年に撮影された16ミリフィルム「映像による塩屋埼周辺の検証」を小型のモニターテレビで上映することも試みました。静的な展示の中に動きのある動画が加わるとコーナーが充実します。

今回の企画では、様々な角度から「塩屋埼灯台とその周辺地区」を多くの地元市民にご理解いただきたいという点に力を込めました。

また、今回の企画においては、10年前の東日本大震災の天津波で大きく変貌したいわき市沿岸部の方々に、今こそ、塩屋埼灯台とその周辺地域が歩んできた



展示した絵葉書など



見学者の様子

様々な歴史と人々の生活の営みをもう一度思い出し、そのことから何かしらのヒントを得て、復興の先にある新しい時代へ突き進んで欲しいという思いが強くなりました。

私自身も120年余前から福島の海の安全を見守ってきた塩屋埼灯台にこれからも思いを寄せ、そこに秘められた歴史と文化をさらに探究し、この灯台が地元いわきの貴重なシンボルとしてこれからも多くの人々から愛され続けられるよう、大切に見守っていきたいと考えています。

## 初めてのオンライン による灯台フェス

映像制作集団BUNZU代表 坂本 博紀

私は、いわき市を中心に、数人の仲間とともに映画

制作を手掛ける映像制作集団BUNZU（以下「ブンズ」）の代表として活動しています。一昨年の灯台フェスでは、灯台の1階入口倉庫をミニシアターに仕立て、事前公募した短編映画作品のコンテストを行う」とよまの灯台短編映画祭」を主催しました。

そして、1年近くを経た令和2年9月「とよまの灯台倶楽部」のメンバーに加わり、灯台記念日等のイベントで活動することに意欲を燃やしていましたが、春先から感染が急拡大した新型コロナウイルスの影響を受け、多くの人々の参集を呼びかけて行う、前回のようなフェスを断念する結果となりました。

その後、倶楽部内では、どのような形での開催が望ましいのかについて検討を繰り返しましたが、ようやく芽を出し始めた「灯台を活用した観光振興」の動きを止めたくない、県内外の方々にも憩いの場としての灯台の存在をもっと伝えたい、という思いがどのメンバーにも強く、コロナ禍にも対応できる方策としてオンラインによる灯台フェスの開催を目指すことになりました。

さて、昨今、すっかり認知度が上がったオンラインイベントですが、機材操作に関する高度かつ専門的な知識、事前撮影、当日の配信などに費やす時間的な労

力がネックとなります。

幸いにもブンズでは、これまで映像を中心としたWEBコンテンツの制作を多く手掛けてきましたので、ごく自然な形で今回のオンラインの担当を引き受けるとともに、諸々の準備を進めることができました。

オンライン配信では、基本的に事前の収録映像と配信当日のライブ映像を組み合わせます。

実施日が、灯台記念日の2日後の11月3日（文化の日）と決まり、約2ヶ月という極めて短い期間で、事前収録とライブ現場の下見、使用機材（ビデオカメラ2台、配信用パソコン1台、モニター用パソコン1台、映像を切り替えるスイッチャー1台など）の準備、通信手段の確保などを進めました。

また、コンテンツについても急ピッチな詰め作業が求められ、メンバー間での意見交換の末、地元ゆかりのある音楽や踊り、食文化、地域活動、風景などを盛り込むことになりました。



中学生達の演舞シーン

オープニングには、地元のいわき市立豊間中学校のソーランチームによる力強い演舞、その後、4組の地元アーティストによる演奏、その合間に地域の紹介を入れることになりました。

豊間中学校のソーランの収録については、校長をはじめ担当の先生方のご理解とご協力のもと、塩屋埼灯台受付前の広場にて灯台が点灯を開始する夕暮れ時に撮影しました。

生徒達は、地元のシンボルを背にしながら踊りを映像に収めることに高い意識を持ち、躍動感のある踊りを舞いきりました。

お陰で素晴らしい映像を収めることができ、頑張ってくれた生徒達に感謝です。

豊間中学校の出演に加えて、中学校に隣接する豊間小学校の校長先生からも「秋まで延期となっていた運動会で特に子供たちが力を入れている鼓笛の様子をオンライン灯台フェスに加えて欲しい」というお話がありました。コロナ禍によ



様々な音楽演奏

って、運動会への保護者の参加も限定しているため、オンラインによって多くの方に見てもらいたいという想いが伝わってきました。両校の映像制作を通じて感じたことは、学校を対象にする際、ライブパシーに配慮する必要があります、様々な制約があるのですが、一般のコロナ禍の中で、先生や保護者の理解、そして灯台をテーマにする取組みに自らも参加したいという熱意がとても強かったという点でした。

一方、地域を紹介する映像については、飲食店のおすすめ料理、海岸のゴミ回収活動などを可能な限り盛り込みました。

また、準備の中で特に苦労したのが通信手段の確保でした。

ライブ映像が円滑にアップロードできなければ、オンライン配信は成り立ちませんが、岬の先端に立つ灯台周辺のWi-Fi環境は脆弱で、十分な通信条件が得られませんでした。

その後、ライブ配信場所付近



様々な視聴者への感謝を伝える

の土産物店が光ルーターを所有していることがわかり、その使用について店側の快諾が得られ、問題は一気に解消し、胸を撫でおろしたことが今でも思い出されます。

その他、数々の準備を経て、ライブ配信当日を迎えました。

ライブ配信のステージは、灯台を見上げる故美空ひばりさんの歌碑の前に設営、午後4時からスタートしました。徐々に暗くなっていく現場では、カメラの明るさの追従が難しく、その調整が心配でしたが、ブンズメンバーの中で映画監督を務める羽賀慎一郎氏にマイク、照明のセッティングなど高度な技術操作をお任せしました。一台のカメラは広範囲を捉え、もう一台が演者のバストアップ、手元、顔のズームを捉える方法をとり、2台のカメラを駆使しながら映像を配信していきました。

約2時間のライブは、演者の円滑な動きのお陰で順調に進み、最後に灯台倶楽部代表の挨拶で終了となりました。

協賛及び協力をいただいた関係者、団体の名前を記したエンドロールが流れた瞬間、スタッフ一同、安堵感と大きな達成感に包まれました。また、今回のオン

ライン配信を通じて次のような教訓も見えてきました。  
た。

- ・進行上のトラブルや機材の操作ミスに備え、迅速に立て直せるように予めバックアップ手段などを準備して臨む。

- ・配信時には、周囲の雑音混入を避けるために会場周辺に立入り禁止区画を設定する。

- ・PCやスマートフォンでの操作に疎い方にもっと積極的に見てもらえるよう周知方法等に工夫する。

実際のライブ配信時の視聴状況は、ピーク時で8人、惜しくも100人を超えない結果でした。周知活動は、チラシの配布を主とし、地元の新開、ラジオの協力も得られました。しかし、より効果的な手段を模索する必要があると感じました。

今回の経験を通じ、この先、コロナ禍が終息してもオンラインを活かしたイベントという形態は定着していくものと思います。コロナ禍の中で検討を重ねた末に実施した「とよまの灯台文化祭」の中で、オンライン配信によって、塩屋埼灯台の歴史と魅力、灯台を取り巻く地元の風景、食文化などを、地元にゆかりのある方々の音楽演奏と共に包括的に紹介できたことは、大変意義がありました。本稿でこのフェスをお知りにな

なった方がいらっしやいましたら、ユーチューブからアーカイブをご覧いただければ幸いです。



ユーチューブ配信



オンライン灯台フェスのQRコード



オンライン灯台フェスロゴマーク

### ◆倶楽部の今後の抱負など

冒頭にも紹介しましたが、とよまの灯台倶楽部は、発足から半年も経っておらず、昨秋どうにか灯台記念日の関連イベントをやり終えたところ です。

本稿の最後に、初代部長を引き受けることになりました私と塩屋埼灯台との関係に触れながら、この倶楽部の今後の抱負を記したいと思います。

今から30年前、私は、豊間地区で最も海沿いに位置する塩場（しおば）に生まれ、毎日、季節も天候も時

間も間わず灯台を眺めて暮らしてきました。

よって、私にとつての塩屋埼灯台は、かけがえのない暮らしの風景の一部であったわけですが、10年前の東日本大震災で私は自宅と共に津波の被害に遭い、その後、豊間から10キロほど南下した内陸部の親戚宅へ身を寄せたことで、約4年間見慣れた白亜の雄姿を拝むことができなくなりました。

その後、災害公営住宅の完成を機に豊間に戻ってからは、灯台への思いが一層強くなりました。また、陽が落ちると放たれる力強い光線に震災復興へ繋がるパワーを感じられ、それまで以上に灯台へ足を向けるようになりました。

灯台は、当時、私が参画していた復興協議会で地域情報を発信するうえでも、特に注目のスポットでした。

3年前、日本の灯台150周年の年の灯台記念日では、福島海上保安部による「大型フレネルレンズの清掃を行う灯台守体験」が催され、初めて入ったレンズ室で、わくわくした表情を浮かべながらレンズを磨く参加者の様子を密着取材しました。

こうして、年々「地域のシンボルである灯台で何かをしたい！」という気持ちが高まって行きました。

2019年に大きな盛り上がりを見せた「点灯12

0周年記念事業」では、私自身も、地元有志の一人として、個々の活動に加わり、灯台と自分たちの暮らす町の魅力を発信することの意義を深く感じました。

そのことが、今でも灯台倶楽部における活動の原動力になっていると思います。

さて、2021年を迎えましたが、まだまだコロナ禍は収まりそうにありません。

しかし、その中であつてもできること、将来に向けて準備を進めておくべきことは必ずあります。

コロナ禍の終息を願いながら、また、今年の3月で東日本大震災から10年を迎えますので、さらなる地域復興にも寄与できるよう、春の灯台ガーデニング作業、夏の星空観望会、夜間の灯台見学、秋には人々が交流できる形での灯台フェスなどを継続して実施できるように倶楽部メンバーが一丸となって活動して行きます。

個々のイベントには、是非とも大勢の方にお越しいただきたいと考えています。

また、私達が取り組んでいますような、各地域のシンボル灯台をテーマとしながら地域の活性化に取組んでいる皆さんとの交流も深まればと思います。

地道に活動されている全国の多くの皆様のご成功を心よりお祈りしています。

資料・動画で伝える

お知らせ！

# 「震災から10年間の 塩屋埼灯台」

2011年3月11日の東日本大震災から10年、本展では、国内の登れる灯台で唯一、未曾有の大災害に直面し、甚大な被害を受けた塩屋埼灯台の震災から今日までの様々なトピックスを写真、空撮動画などを通じて紹介します。

同時に、灯台の側面には、震災の津波で犠牲になった鈴木姫花さんが描いた灯台の絵のハンカチと地元の小学生、中学生の寄書きによる旗を掲げます。

期間：令和3年3月6日から3月21日まで

場所：塩屋埼灯台構内  
福島県いわき市平薄磯字宿崎34



主催：とよまの灯台倶楽部  
問合せ先：  
倶楽部代表 小野陽洋  
090-4635-1572

## 多岐に渡る業務を体感！

### 海上交通業務実習（情報システム課程第28期）

海上保安学校



令和2年12月7日及び10日、情報システム課程第28期生は、空山A I S陸上局、舞鶴浮標置場及び海上保安学校において海上交通業務に関する実習を行ないました。

実習にあたり、空山A I S陸上局では、舞鶴海上保安部交通課長から無線検査の対応や、同局の電源からアンテナに至るまでの無線設備について、舞鶴浮標置場では、第八管区海上保安部交通部整備課職員から灯浮標の標体、頭標、鉄鎖、沈すい等に至る構造、調達方法、視認性及び標識としての機能・使用方法について、当校では、第八管区海上保安部交通部企画課、同航行安全課、同安全対策課、舞鶴海上保安部交通課職員から海上保安部交通業務について熱い指導を受けました。

特に当校での各実習では、実習生の4～7期先輩である若手職員に講師となっており、対話しながら、

距離感のない工夫を凝らした説明で学生に分かりやすいものとなりました。

各実習全般を通して、素晴らしい講師の方々のおかげで、「頭標取付け金物はなぜ曲がっているのか」「鉄鎖は、使用前に塗装を行なうのか」「台風津波対策委員会はどういうタイミングで開催されるのか」などの質問がでるなど、普段の座学では眠たそうにしている学生でも、当日は、積極的に質問し、メモを取る姿を見ることができ、「腰は低く、アンテナは高く」もしっかりとメモされていました。

情報システム課程第28期学生（2年生）の、交通業務にかかる実習は、これが最後となり、二陸技（一陸技）取得、三海通取得、各種課業の試験をクリアして現場に臨みますので、各現場の皆様には、温かく迎え入れていただければと存じます。

## 空山A I S陸上局校外実習



A I S陸上局無線検査受検手順の説明



A I S陸上局の電源等の説明

## 舞鶴浮標置場での実習



コロナ禍のマナー手指消毒



標体の説明



三ツ目環と鉄鎖の違いは。。。。



転環の重さを体感



頭標取付け金物の歪みは何のため？



南方位標識の頭標の形を確認



灯浮標の大きさを体感！

## 交通業務の説明



航路標識業務の説明



航行安全業務の説明



安全対策業務の説明



海上保安部交通課業務の説明

# 岩崎ノ鼻灯台における隣接保安部合同技術研修

金沢海上保安部次長 藤 島 充 良

## 1 はじめに

第九管区海上保安本部交通部は、平成30年度から「第九管区交通業務人材育成プログラム実施要領」を定め、海上交通業務全般に係る素養標準の知識・能力を取得するための研修を実施しています。

対象職員は、海上交通業務に従事する係長以下の職員で、年2回のセルフチェックシートにより自己の習熟状況を把握し、必要な素養の習得に努めるものです。基本的には、このセルフチェックシートを活用し、本人の成長を促す自己啓発によって必要な素養を習得していくものです。

また、海上保安部署次長においては、部署推進管理者の責任者として組織研修の年間研修計画を策定し、対象職員に研修を実施することとなっています。

このセルフチェックシートは、海上交通業務における必要な素養標準項目が網羅されており、習熟の程度

としてSからDまでのレベルが付与され、自己の能力の現状が把握できることとなっています。なお、参考として、BからDは以下のとおりとなっています。

B：習得した知識を用いて、他者のサポートを得て実践できる

C：知識の概要は理解できている

D：経験がない

上記要領を踏まえ、金沢海上保安部では、このセルフチェックシートにおけるC及びD項目を中心に組織研修を実施する方針としています。

## 2 実体験を通じた技術研修を実施

セルフチェックシートに挙げられた項目は、必要な業務内容を網羅しており完成度が高いものの、実際にこれら全ての業務を経験又は習得している者は、部署係長以下では、珍しい存在と思われれます。また、その部署の環境にもより、航路標識機器については、チェ

ックシートに書かれた機器が、その部署に存在しないことがあり、いつまでたってもDの「経験なし」が付与されてしまうこととなります。

そこで、伏木海上保安部と当部においては、令和元年及び令和2年において、その部署にない機器の扱いに関する研修を合同で行ってきました。

令和元年においては、伏木海上保安部管内に保有しないA I S陸上局の点検として当部の宝達山A I S送受信所における送信電力等のデータ取りの保守点検を合同にて実施しています。

また、令和2年においては、当部施設にない水銀槽式回転機械に係る技術研修を伏木海上保安部所管の岩崎ノ鼻灯台にて小職が講師をさせていただくこととな



岩崎ノ鼻灯台

り、伏木海上保安部からは2名、当該研修に参加していただくこととなりました。

水銀槽式回転機械は、水銀の有害性からL B M型灯器など新しい機器に換装され、減少している状況ではありますが、九管区内においては、まだまだ現役で使用されている機器であり、人材育成プログラムにおいても当該装置について「機構を把握し、取り扱い、点検ができるか」という項目があり知識の習得が必要となっております。

また、人材育成プログラムによる組織研修のほとんどは座学であるものの、技術研修においては、現物を前に説明した方が理解しやすく、生きた研修であると考え、実機器を用いた技術研修を行うこととしました。

### 3 研修資料の事前配布と安全対策

水銀槽式回転機械の取り扱いは、昭和46年9月に制定された「水銀槽式回転機械取扱要領」にオーバーホールの要領や取扱方法が詳細に記載されており、その他研修資料を事前に配布し、研修対象者に予習を促していただいでから実技研修に臨みました。同要領については、過去の障害経緯から軽油の注入については、禁止されていますので、全てが正しいわけではなく留意

が必要です。

また、研修に入る前には、水銀ガスの関係から施設を十分に換気するとともにブリーフィングによる説明を実施してから灯室に入りました。

水銀ガスは人体に影響がありますので、30分以上換気することによ

り、基準値以下に下げることができます。オーバーホールを行う際には、水銀ガスが発生しやすくなりますので、水銀ガスに対応する防毒マスクを着用する必要があります。

#### 4 実機を用いた構造及びメンテナンス説明

岩崎ノ鼻灯台の水銀槽式回転機械は第四等の規模であり、全国的には第四等クラスの水銀槽式回転機械はレンズ毎、新しい機器に換装される傾向にあります。



研修前のブリーフィング（金沢、伏木保安部職員）

伏木保安部管内には、同灯台のほか生地鼻灯台にも水銀槽式回転機械が残されています。

岩崎ノ鼻灯台の水銀槽式回転機械を見るのは、小職にとっては初めてのことでしたが、状態が良く、手回しをしただけで、定期的なメンテナンスと熟練した業者による整備実施を感じることができました。

#### 5 実際のオーバーホールの模様

水銀槽式回転機械のオーバーホールは、10年毎に実施され、この際に、サイクル減速器も交換します。サイクル減速器は、オーバーホールするより新たに製造した方が約半額で製造できますので、予備として新造します。

以下、小職が担当した第四等水銀槽式回転機械のオ



構造及びメンテナンス方法の説明



外槽が下りた状態



水銀をガーゼでこし計量



鋼球の取り出し

パーホールの状況を参考に掲載します。

概要は以下のとおりで、外槽を下ろし、コックを開いて水銀を抜き、ガーゼ6枚程度を重ねて水銀をこし、不純物を除去し水銀計量の後、元に戻します。

次にペアリングの役目を果たす鋼球を取り出し、摩耗を計測して異常がなければグリスを付けて元に戻します。

## 6 おわりに

今回の技術研修は、岩崎ノ鼻灯台の水銀槽式回転機の実機を使用しての生きた研修実践することができました。

小職が管区本部にて技術官をしていた頃は、毎年、当たり前のように技術研修を行っていましたが、ほとんどの灯台がLED化、太陽電池化され、メンテナン

にとつては、オリジナルの機器であることで真の値打ちがあり、当面は、こういった古い機器の技術の伝承も必要ではないかと考えます。

なお、本研修に際しては、年末の忙しい時期に快く対応していただいた伏木海上保安部の方に、本誌を借りして御礼申し上げたいと思います。



鋼球の摩耗計測

すが省力化され、油をさしたり、機器の調整を行うことが疎遠となりつつあります。

歴史的灯台においては、機器もオリジナルで残されている所があり、新しい機器に換装することは容易いですが、その灯台

## 2021年 尻屋埼灯台及び入道埼灯台参観開始について

### 尻屋埼灯台

青森県



### ★尻屋埼灯台は下記の通り参観いたします★

参観期間 2021年4月24日(土)～  
2021年11月3日(※)  
参観時間 9時～16時  
※4月30日までは9時～15時  
灯光会尻屋埼支所 ☎ 0175-47-2889



尻屋埼の参観状況

### 入道埼灯台

秋田県



### ★入道埼灯台は下記の通り参観いたします★

参観期間 2021年4月17日(土)～  
2021年11月3日(※)  
参観時間 9時～16時  
※4月17日～10月15日 土日等は  
9時～16時30分  
灯光会入道埼支所 ☎ 090-1931-9706



入道埼の参観状況



## 物品購買広告

一 石材 貳千四百廿五才 伊豫國越智郡大島産

(才は石材の体積の単位 1才は 0・0278m<sup>3</sup>)

一 セメント 百拾樽

長門國小野田セメント會社製品

一 煉瓦石 六万七千五百個

一 木材 百六拾三點

以上四種共入札保証金ハ各自見積代金ノ百分ノ五以上 契約保証金ハ請負代金ノ百分ノ十一以上入札者ハ二年以來其營業ニ従事スルモノニ限ル

右競争ニ付シ購買ス供給望ノ者ハ 来七月六日迄ニ当事務所に就キ 仕様書及見本品 入札人心得書案等熟覽ノ上 七月七日午後一時限り 營業証明書及入札保証金ヲ添ヘ 入札書差出すベシ 但改札ハ即時越智郡役所ニ於テ執行ス

此契約ハ航路標識管理所技手井口経彦締結ス

明治三十二年六月二十二日

愛媛県越智郡役所内

中渡島航路標識

建築事務所

(セメントの購買は、この4日後の6月27日付の広告にて取り消されている)

この広告から、中渡島灯台の石材が、近隣の大島から今も産出される大島石であったことが分かります。大島石は、瀬戸内海では庵治石と並ぶ高級御影石として、国会議事堂、赤坂離宮、大阪心齋橋ほか各地の著名な石造建築に使用されています。



資料 - 2 中渡島灯台の位置図

この契約の締結者「井口経彦」の名は、工事開始の

約一ヶ月前の明治32年5月31日付通信公報第2293号の叙任辞令の記録に次のとおり記されています。

航路標識管理所技手 井口 経彦

航路標識看守 桶川 孝太郎

愛媛県下へ出張並ニ該出張中広島県下尾道因島へ臨機出張ヲ命ス

明治32年5月25日

臨機出張先の尾道と因島は、共にしまなみ海道沿いの石材・石工の宝庫です。しまなみ海道沿いには、この5年前に、大下島灯台ほか異例の7基もの石造灯台が一度に設置されています（拙稿57、59参照）。井口経彦は、この地区を訪れその実績を踏まえ、中渡島灯台の石材を大島石に限定しています。

工事開始は、前記の通信省第十五年报では、6月25日とされていますが、入札公告からも分かる通り、灯台の建造は7月7日以降であったことが、同32年6月29日付の海南新聞にも次のとおり見られます。

●燈台建設 来島海峡へ燈台を建設せんため通信省より出張したる航路標識管理所技手の一行は昨今大

島掠名村に在り七月七日物件購買入札を行ひ直に中渡島字ムシへ建築に着手すべしといふ

記事の航路標識管理所技手一行とは、井口経彦と桶川孝太郎と考えられます。井口経彦は、中渡島灯台を手掛ける半年前まで、同じ石造りの経ヶ岬灯台の工事に、技手の筆頭「山本哉三郎」と共に携わっていた記録が通信公報から確認できます（拙稿35「美保関灯台（後編）」参照）。中渡島灯台は、石造大灯台の建設に直前まで従事した井口経彦が、責任者（監督）として携わった灯台でした。

#### 灯台の特徴

中渡島灯台には、他の灯台には見られない特異な特徴が見られます。灯台の外壁の仕上げが、石造灯台とは思えない滑らかな加工の「のみ切り仕上げ」となっていることです。お雇い外国人が去った後、日本の石造灯台は、ごつごつした凹凸のある「割肌仕上げ」又は「コブ出し仕上げ」の灯台がほとんどです。明治10年代の緑剛埼や立石岬、20年代は大下島灯台他しまなみ海道沿いの全ての灯台、30年代は出雲日御碕、美保関、経ヶ岬、水ノ子島などすべて「コブ出し仕上げ」

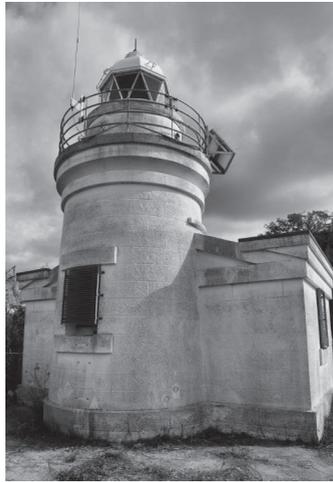


写真-2・3 のみ切り仕上げの中渡島灯台（右）と  
コブ出し仕上げの経ヶ岬灯台（左）

のごつごつした灯台です。中渡島灯台は30年代唯一の「のみ切り仕上げ」の灯台です。しかし、お雇い外国人の帰国以降、もう一基だけ「のみ切り仕上げ」の灯台があります。明治28年12月に点灯開始の男木島灯台です。

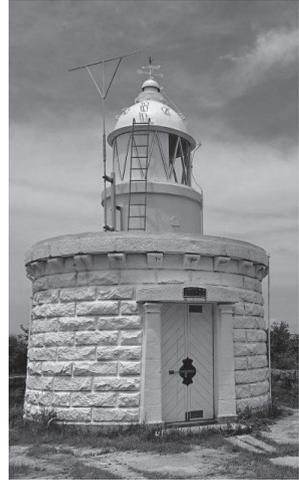


写真-4・5・6 全国のコブ出し仕上げの石造灯台  
立石岬灯台（右）、大下島灯台（中央）、水ノ子島灯台（左）



写真-7 のみ切り仕上げの  
男木島灯台

なぜ、両灯台だけが慣例の「コブ出し仕上げ」とせず、手間暇かかる「のみ切り仕上げ」にしたのかは、関係記録がまだ見付からず分かっていません。ただ、両灯台に共通するのは、瀬戸内海の灯台であること、そして庵治石と大島石という名の知れた高級御影石を使用していることです。両灯台を目の当たりにすると、他の灯台とは異なる見事な造りに、国の事業とはいえず、工事に関わった職人たちの意気込みを感じずにはいられません。男木島灯台と中渡島灯台は、石工たちが最上級の御影石に対し、己の培った腕を惜しみなく打ち込み作り上げた、規格外の傑作のように愚生には思えたりなりません。それを監督したのが技手井口経彦でした。

### 潮流信号所への変更

明治33（1900）年4月20日に点灯を開始した中渡島灯台の告示は次のとおりです。

○ 逋信省告示第百九十二号

愛媛縣下伊豫國来島海峡中渡島、山口縣下長門國下ノ関海峡西口竹子島臺場鼻及沖繩縣下琉球國那覇港ニ重城ニ燈臺ヲ建設シ不動白色ノ燈明無等ヲ設ケ孰レモ本月二十日以後點火ス

但燈光区域ノ方位ハ海上ヨリ燈臺ニ向ケ測定ス

明治三十三年四月十一日

逋信大臣子爵芳川顯正

### 中渡島燈臺

一 該燈臺ノ位置ハ伊豫國越智郡渦浦村中渡島ノ西北端ニシテ水路部出版第百三十二号ノ海圖ニ拠レバ北緯三十四度七分二秒東經百三十二度五十九分四十四秒ニ當ル

一 該燈臺ハ石造圓形ニシテ白色ニ塗リ基礎ヨリ燈火マデ高サ二丈五尺四寸（約7.7m）ナリ

一 該燈火ハ真方位北三十四度五十五分西ヨリ南ハ

十一度三十五分西マデ二百九十六度三十分間ヲ照輝ス

一 該燈火ハ八十燭光ニシテ 水面ヨリ高サ十二丈六尺四寸(約38.3m)其光達距離ハ晴天ノ夜六海里(約11km)ナリ

この9年後の明治42(1909)年7月、中渡島灯台は廃止され、灯台の建物はそのまま、灯台の前方に腕木式信号を併設し、中渡島潮流信号所に生まれ変わります。運用開始時の告示は次のとおりです。

○通信省告示第六百七十五号

来島海峡中渡島二信号所ヲ置キ 明治四十二年八月十五日ヨリ 明治四十二年七月通信省告示第六百七十三号及左記ノ規定ニ依リ潮流信号ヲ開始ス  
明治四十二年七月十七日

通信大臣男爵 後藤新平

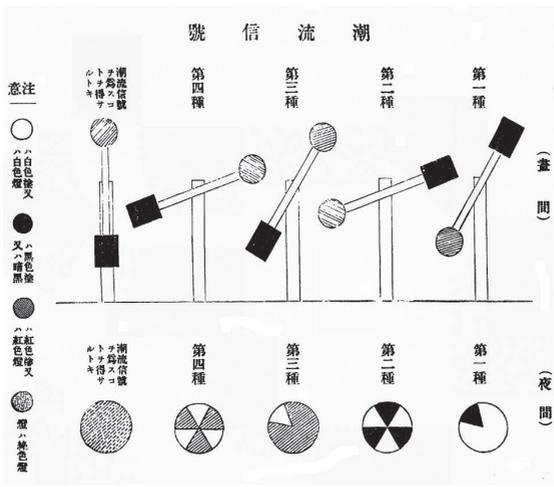
一 信号ハ 中水道(八幡瀬戸)ニ於ケル中渡島西側ノ潮流時期ヲ示シ其ノ意義ハ左ニ掲グル所ニ依ル

第一種 南流ノ初期又ハ末期

第二種 南流ノ中央期

第三種 北流ノ初期又ハ末期  
第四種 北流ノ中央期

二 前項ニ於テ南流ト称スルハ 安芸灘ノ方ヨリ燧灘ノ方ニ流ルル潮流、北流ト称スルハ 燧灘ノ方ヨリ安芸灘ノ方ニ流ルル潮流ヲ謂フ



資料-3 潮流信号の図  
(明治42年 通信省告示第673号に掲載)

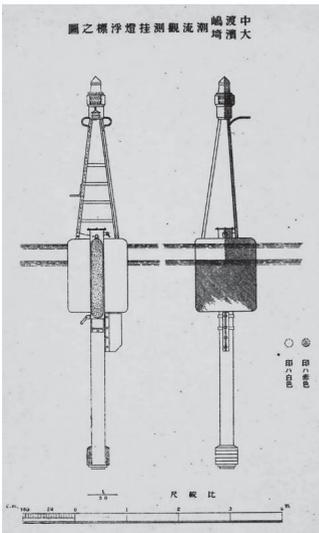
また通信省告示第673号には、潮流信号の図(資

料3)にある腕木式信号の傾斜角度が、それぞれ約30度と70度であること、夜間の灯光による信号は、紅・白・緑の様々な色を変えて照らしていたこと、潮流の初期、中央期、末期とは、流れ始めから止まるまでを約三等分した期間であることが示されています。

中渡島灯台がこの潮流信号所へと変更された理由については、明治45年3月刊行の航路標識管理所第四年報の新設航路標識の報告に次のとおり見られます。

下ノ関海峡及三原瀬戸並ニ来島海峡航路ハ、屈曲狭隘ニシテ潮流甚ダ急ナルニモ拘ハラズ、大小船舶ノ交通ハ年々其数ヲ増加スルノ趨勢ナルヲ以テ、随テ衝突座洲等ノ危険尠ナシトセズ、是等通航船ニ対シ前路ノ安否ト潮流ノ方向緩急ヲ予知セシムルハ、航路ノ安寧ヲ維持スル緊要設備ナルヲ認メ、四十年ヨリ四十二年度ニ至ル三ヶ年度ノ継続工事トシテ、四十一年五月其工ヲ起シ四十二年三月ヲ以テ全部竣工セリ

中渡島潮流信号所には前記の腕木式信号機のほか、今も中渡島に残骸が残る検潮所(写真8)と潮流観測用ブイ(資料4)の設置が、同報告書に記されています。



資料-4 潮流観測用ブイの図  
(航路標識管理所第四年報)

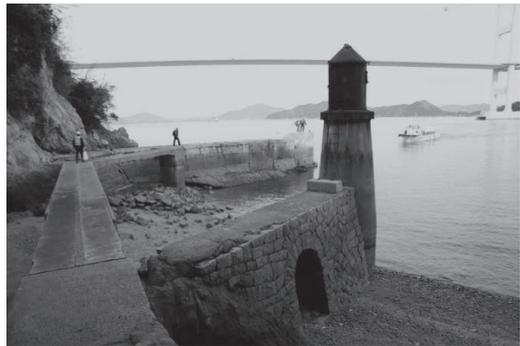


写真-8 現在の中渡島の検潮所跡  
(令和2年12月撮影)

検潮器浪除塔 ハ最大潮時ニ於ケル干潮面下三尺以上ノ深サヲ保ツベキ海中ニ於テ陸上ト突堤トノ短距離ニシテ大浪ニ襲ハレザル位置ヲ撰ミ塔ハ八角筒形ノ混凝土造トシ頭ニ圓形ノ鐵造機械室ヲ冠設シ其中央ニ検潮器（火ノ山下・大濱崎スクリュー式、中渡島リチャート式）ヲ据着ク然シテ陸上トノ聯絡ハ石垣突堤ヲ設ケ機械室昇降鐵梯子等ヲ設ク

潮流観測用浮標 中渡島及大濱崎ニ於テハ「アガ」式「アセトン」瓦斯挂灯浮標ヲ用ヒ各半面ハ白色燈他ノ半面ハ紅色燈トシ浮標モ亦之レニ倣ヒテ塗装シ干満潮流ノ方向正シクシテ見張所ヨリノ観望ニ便ナル位置ヲ撰ミ碇置ス

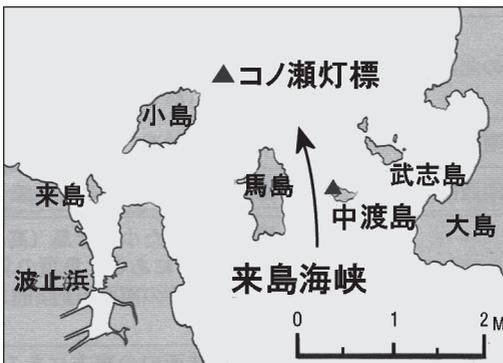
明治の終り、中渡島の岸辺には外国製の自動検潮器が設置され、最大10ノットにも達する激流の海域には、紅白に塗られた観測用ブイまで投入されていたのである。中渡島の職員は、1日4回変わる潮の流れを、正確に信号の切り替えて伝えるため、検潮所の観測記録や激流に翻弄されるブイの動静監視に、24時間緊張を強いられていたことが容易に想像されます。しかし、その緊張の業務にも勝る大変な作業が、中渡島では既

に存在していました。（今も治海上保安部に保管の中渡島潮流信号所経歴簿を見ると、観測用ブイは、やはり激流には耐えられなかったようで、設置からわずか4年後の大正2年4月に廃止撤去されています）

### コノ瀬灯標の保守管理

燈光昭和9年7月号に掲載の「第三回視察の旅」の記事の中で、中渡島潮流信号所の視察時の様子が紹介され、同所が管理するコノ瀬灯標を、横浜本局の職員が「本邦最難燈標の称ある」と記しています。

コノ瀬灯標は、中渡島から北西約2マイルにある鴻の瀬に、明治35（1902）年4月20日に設置された基礎から高さ約14メートルにも及ぶ石造の灯標です。監督官は青山鼎之助



資料-5 旧コノ瀬灯標の位置図

技師、石材は中渡島灯台と同じ大島石を使い、切出した石材は山本という棟梁の下、石工たちが馬島のはぜの浦で加工し、灯標建設中には吊り上げた石の下敷きになり半蔵という人夫が亡くなっている悲話、燈光昭和54年5月号の田中でつばん著「鴻の瀬燈標ものがたり 第2回」の現地古老の回顧談に見られます。点灯開始当初は、大濱灯台が管理していましたが、明治37年1月から中渡島灯台に移り、以降は中渡島潮流信号所職員が激流をぬって定期保守を行っていました。灯器は厚形石綿単心灯器から装葉持久灯器、アセチレンガス灯器と、次々と改良されていますが、保守の大変さは変わらず、燈光昭和25年3月号の記事には、当時の職員の中田久一氏による「燈臺の生活」の中で次のとおり報告されています。

(当所の)業務上の危険作業は、高圧瓦斯発生とコノ瀬燈標の貯気筒交換、其れに同燈標の塗替へ作業でせう。

瓦斯発生については、現在迄に幾人かの怪我人が出ています。不注意と一概にせめる事は出来ませんでせう。危険物を取扱っているのですから。

コノ瀬燈標の貯気筒交換は、本所では一番難作業で

す。潮流のストラックを見計らつての仕事ですから。

来島海峡の西水道の中央に、激しい潮流を噛み乍ら佇立している此の燈標に、一〇〇

キログラム 近いボンベ

イを捲上げ、捲下げするのですが、

慣れないと雲と潮の流れとで今にも燈標がひっくりかへるような錯覚を起します。

現に手傳人夫の人達が幾人も代るのは、此の燈標に昇り下りするのが恐ろしいからです。塗替工事も同様で矢張り慣れても気持ちのよいものではありませんし、燈標現場業務の労苦が沁々感ぜられます。勤務員は少ないので年老いた所長も一緒に、労働作業にタツクせねばならないのが燈臺業務の一つの特異性でせう。

中渡島潮流信号所経歴簿によれば、運用開始当初3



写真-9 激流の中のコノ瀬灯標  
(当時の絵葉書より)

名居た職員は、すぐに2名となり、以降は2名体制で、24時間気が抜けない信号切替え業務に加え、コノ瀬灯標ほか管理標識の定期保守作業を行なっていました。同簿にはまた用船舶員の相次ぐ交代と、他では見られない数多くの賃金増額の記録も間違いなく記されていました。コノ瀬灯標の保守管理は、昭和33年に今治航路標識事務所に集約移管されるまで、中渡島潮流信号所の職員が行っていました。

令和の現在、コノ瀬灯標は来島海峡にはなく、今治市唐子浜の沖にて余生を過ごしています。昭和40年代終わり頃から、来島海峡西水道の航路上にあるコノ瀬灯標の撤去浚渫が計画され、当初は爆破解体される予定であったものが、当時愛媛県公安委員長で社団法人今治地方国立公園協会会長でもあった赤穂義夫氏が発起人となり鴻ノ瀬灯台保存会が結成され、移設に必要な経費5000万円が集められ、調整の結果、昭和53(1978)年10月に同地に移設保存され、古閑裕而作曲の記念の歌まで作られていた全容が、当時今治海上保安部長であった邊見正和氏がまとめた「赤灯台を残そう」(燈光会編集発行)に詳記されています。

また、潮流信号所の腕木式信号機も、明治42年(平成2年)まで使用の初代の信号機が、しまなみ海道沿い

のサンライズ糸山に、平成2年から潮流信号所廃止の同24年まで使用の二代目が、今治港のフェリーコンコースに移設され(写真10)、今日もその雄姿を見ることができます。



写真-10 二代目腕木式信号機  
(於今治港 平成31年撮影)

### 中渡島での生活

前記の燈光記事「燈臺の生活」には、中渡島の生活の実態が次のとおり見られます。

今治市は指呼の間と言へば言へる海路三<sup>かいり</sup>湊、本所所在地の渦浦村迄海路一・五湊。斯う書けば「なんだ中渡島も大した事はないではないか」と言はれるかも知

れませんが、名にし負ふ中渡瀬戸の潮流は鳴門に次ぐ激流、思ひに任せないのは人の世許りでもありません。殊に冬の季節風（北西）が吹く頃は、島に舟等は一寸も寄せられません。備船は錨地がないので対岸に避難、郵便船も五日も六日も来ません、心細い事限りなく、まあ忍苦の二字につきませう。

医者、産婆も同じように、海峡が大障害、備船によつて今治市へ三漚、大島の津倉迄海路一・一漚、陸路約四料、備船の避難中急病者でもあれば総ては神佛にお任せです。教育も随つて家族別居生活以外には途はありません。

其の他生活上の困難としては、中渡島は無人島である以外に一滴の湧水もありませんので、水に一番困難をします。猫の顔ほどの野菜畑も夏には殆んど枯死します。水のないと言ふ事は本當に辛いものです。御風呂は一ヶ月四回、其の浴後の水で瓦斯を発生させるのですから、恵まれた都会の人達には想像もつきません。其れでも住めば都とやらで、永年の燈臺生活が一つの諦めに似た解脱から、総てを神佛にお任せして、一日二十四時間の當直勤務も感謝の念で勤めています。

水でガスを発生させるとは、カーバイト（炭化カル

シウム）に水を浸し発生させていたアセチレンガスのことです。このガスが灯台のガス灯器の燃料でした。中渡島での日常を記した数々の燈光記事には、不便で多忙であつた惨状が見られますが、島での日々を称賛した記事もあります。戦後間もない燈光昭和22年10月号に掲載の職員の奥様が記した「中渡島の思い出」に次の一文が見られます。

水もない、人家もない、さうして電燈すらない孤島の生活は凡そ文化も文明も縁遠くむしろ原始時代の思はせる様な生活が静かに平穩に続く。忙しい業務の寸暇を見て下駄作りに、野菜作りに又海藻取りにと忙しい主人に感謝しつつ二児をかかえて家事を修め、迫り行く食糧難と戦ふ。物質には決して恵まれて居なかつたが、自然に浸つた素直な生活はお互に美しい雰囲気をもたらしした。一本の初うりも分け合つてその美味を賞し、働くよろこびを共に語り合ふ。ストもなければ闘争もさうして、まはしき盗難など更にもない。それは人間的に見て進歩も向上もなく淋しい事かも知れないけれど、女と生れた自分が、主人と子供の中に静かに浸つてゐる幸福をしみじみ思ふ。雨の少ない酷暑からやつと解放されて、海の色と空の色も濃紺色を帯

びて来ると来島海峡を名も知らぬ鳥が渡つて来る。

### 島渡る海峡青く潮満ちし

渦潮のさかまく海峡に下り立ち、磯のものをあさる時もたのしいものだ。何時か子供心にかへつて無心にかきをたたき瀬戸貝を取る時、秋の日は最早暮れ初めて、対岸の入江に一人おきな釣を見る。戦場に送つて老いの身を一人、夕ぐれまで釣り残つてゐるのだからか。頭の禿げ上つたよく見かける人である。

### 夕ぐれの入江におきな一人釣る

中渡島の夕焼は美しい。藤村の椰子の実をしみじみと味はせる。海も空も金色に輝く中に無数に散在する島々が丸く浮き上る。ああ瀬戸の夕焼、あんなにも郷愁をそそるものが外にあるであらうか。

中渡島は取り分けて雨の少ない所だけに雨の降る日は、しみじみと雨の音を聞く。よし切りの葉がさらさらと音をたてて機械船のはがと触れつつ何時までも続く。

### 風呂たてて一人静かに時音聞く

### 符字上げて峡行く船に時雨かな

秋日和の続くころ近くに見える島々に、もみぢが色づき、祭太鼓が聞へ、神社ののぼりまで遠くながめら



写真一11 昭和25年の中渡島視察写真  
(燈光会 伊藤武夫氏アルバムより)

れる。小鳥の群は赤き木の実をあさつておびただし。私共はいも堀にまき割りにと随分忙しい日々を送る。

### まき割れば赤きばらの実こぼれけり

いつか石鍾の山に雪を戴き、海峡を吹き抜く風が身にしみるところ、渦潮の音は日に増し高く、夜ともなれば冷たい冬の月が燈塔に白くさへかへる。

### 来島の潮とどろきて月さめる

### よぎり行く渦の海峡月の船

中渡島の思い出は常に尽きない。自然を友とし自然

の中に浸ったあの平穏な生活は、私には又とない尊い過去である。

筆者は子供の養育のため、故郷に帰り夫と別居しており、家族が揃って過ごした平穏な中渡島での生活を懐かしく振り返り書いています。夕焼けに染まる安芸灘の島々や雪を戴く石鎚山など、当時の中渡島から見た美しい情景が鮮やかに浮かびます。つつましく暮らした中渡島での一年を季節ごとに俳句にし、中渡島での四季折々の移ろいが堪能できます。

中渡島の情景を絶賛する記事は、この他にも見られます。燈光大正7（1918）年5月号には、当時の中渡島の看守長「三上亮太郎」（ペンネーム夢想兵衛）による中渡島便りの記事に、中渡島が次のように紹介されています。

當所は無人の一小島に御座候處、全島桃園にして時恰も花盛期加ふるに眺望佳絶、梅花はなくも金衣公子の転するあり、目下は都人士一日の清遊に値ひ可致と存じ候得共、訪づれば来る人士も御座なく、花神もいかにかり遺憾の事と存ぜられ候

本島口 噂によれば、中古戦国時代に努力衆に勝れ

る一巨漢あり本島絶頂に居を構ひ順風を得當水道を通過する親船を見懸け強弓を射て帆綱を切断し置き略奪を恣まにしたり赴き「ローマンチック」の傳説御座候由なれど何れ取調の上後便委細可申上と存候

當所は前勤地（高根島信号所）と事變はり大船巨船の通過夥しく日夜視界に殆んど船影を認めざる事なき有様に有之、巨船指顧の間を通過致し候折りは黄白黒人の甲板上に嬉々として運動致し居る有様物珍しく夜間などは一大不夜浮城の壮観一入の眺に御座候

今から約100年前の中渡島は、全島が桃園でウグイスが鳴き、物見遊山が出来る程なのに誰も来なくて残念だと記されています。桃の花が満開でウグイスの声が聞こえるまさに桃源郷のような島の眺望を、現在の中渡島からは全く想像も出来ません。しかし調べてみると、中渡島の四国側対岸の丘陵地が、かつてはモモやサクラが咲き誇り桃山と呼ばれ、明治から昭和初期にかけては風光明媚な別荘地であった事実が、今治の地域史研究家大成経凡氏の著書「近見ぶらぶら歩き」にも見られることから、この記事は誇張して書か

れてはいないようです。

また、戦国時代には強弓の強者が島に住んでいたとの伝承も見られます。文化庁作成の「村上海賊の城」と題した日本遺産を紹介するパンフレットには、村上海賊のお城が、中渡島にも存在していたと記されています。中途城と称した中渡島のお城が、天文15（1546）年の周防大内氏との海戦の舞台になり、海上での合戦で大内氏の家臣が矢で傷を負ったとの書状が残されているのです。燈光記事にある強弓の強者の伝説に通じるものです。

中途城に関する調査は、まだ行われていないようですが、隣の武志島の務司城と同様に、天正13（1585）年頃まで、小説「村上海賊の娘」にも出て来る能



資料—6 中渡島・武志島古絵図  
(明治8年 石川県地理図誌より)

島村上氏のお城が、確かに中渡島にも存在していたようです。

村上海賊の娘「景」や弟「景近」が、もしや中渡島に来ていたのかもしれないぬと想像しながら、令和2年の年末、今治海上保安部の定期点検に同行させていただきました。中渡島灯台を訪ねました。

### 中渡島灯台の訪問

中渡島へは、今治港から用船で所要約15分、島の船着場は検潮所跡がある島の北側にあります。そこから上陸後、島の最西端にある灯台までは、つづら折りの道を上っていきます。年に一度の点検のため、道は草木に覆われ、なかなか進むことができず、枝木を払いながらの行軍でした。

灯台の構内は、煉瓦造りの官舎も倉庫も撤去され、草むらの奥に灯台だけが来島大橋を背にしてポツンと建っていました。一瞥しただけでは、石造灯台には見えず、コンクリートの灯台のようでした。灯台の全体が白く塗られ凹凸がないため、漆喰で覆われたレンガ灯台のようにも見え、同じ「のみ切り仕上げ」の男木島灯台とは印象が全く異なりました。しかし、近づいてよく見ると、すべてが滑らかな切石積みで、間違

なく「のみ切り仕上げ」の石造灯台でした。石材の大きさは、計測したものは103cm×29cmで男木島灯台とほぼ同じでした。

中に入ると、ガラーンとした室内も白く塗られ、灯塔への入口の石材だけが塗られておらず、色むらのないきめ細かな高級御影の石肌が確認できました。灯塔内は、残されていた板張りも真っ白に塗られ、不動灯であったため分銅筒はなく、灯室へ上る鑄鉄製の梯子だけが架けられていました(写真12)。その梯子は、明治30年代からの灯台に多く見られる、一段ずつ組み立て式の汎用型ではなく、中渡島灯台の高さに合わせて鉄板を強固にねじって作り上げた、古来の灯台の梯子のスタイルでした。



写真-12 鑄鉄製の梯子  
(令和2年12月撮影)

灯籠は内部が補修されていますが、古い写真に写る灯籠と同じ点灯開始からのものでした。回廊に出ると、灯籠の玻璃板を支える石材が、すぐ目に飛び込んできました。ふっくらした曲線は、どこかで見覚えがありました。写真13のとおり男木島灯台のものと同じでした。つい触りたくなるような柔らかな曲線美です。ここまで滑らかに仕上げた灯台の石材は、ほとんど目にすることはありません。並べて見比べると、まさに石工の技の競演です。

また、灯台回廊からの眺めは圧巻でした。目の前の



写真-13 曲線をもつ灯台の石材  
(上：中渡島、下：男木島)



写真-14 中渡島灯台回廊からの眺望  
(令和2年12月撮影)

想像以上でした。静寂を破る船の汽笛にも圧倒されませんでした。潮の流れが速い時は、その壮観な眺めがもつと凄いいことは、すぐに想像できました。

中渡島灯台の知られざる魅力を堪能した気分でした。対岸からこんなに近いのに、大島石の見事な石造灯台も、島に次々と迫り来る船の醍醐味も、村上海賊の幻の中途城も、誰にも知られず眠り続けているなん

来島大橋と安芸灘の島々が織りなす優美な風景をバックに、来島海峡の水道を行き交う船団の醍醐味！ 三上看守長の記事のとおり、船員が何をしているか分かるぐらいに、島の間近まで次々と迫って来る船の勢いは

て、いかばかり遺憾の事と存ぜられ候でした。

(明治の灯台の話64 中渡島灯台)

中渡島灯台に関する貴重な保存資料の閲覧及び灯台の点検に同行し歴史調査を特別に許可いただいた今治海上保安部 三國登志夫交通課長並びに日野聡次長に對しまして、この場を借りて改めて心から深謝いたします。

— 明治の灯台の話 —

## (30) から (61) 話までを

### 振り返り (後編)

灯台 研究生



49 神子元島灯台 (2012年9月号、10月号、

2013年5月号、8月号)

4回に分け1年近くを要した拙稿の中の最長編です。沖繩勤務で、九州・沖繩の灯台を書き続け、なぜここで伊豆の神子元島灯台を書いたのか。いつの頃からか拙稿の最後は神子元島を書いて、筆を置こうと考えていました。また、映画「男はつらいよ」(世界最長編の映画としてギネス記録)が48話で終え、48という数字が心の隅にありました。この頃、仕事が厳しく書き続ける余裕がなくなり、書き残しの灯台もありましたが、もうそろそろ潮時だと判断し、集大成のつもりで4回に分け神子元島灯台を書く決心でした。

1話目は、ブラントンの最初に手掛けた灯台が破格の建設費をかけた理由と、その灯台建設の詳細です。屋久島灯台の拙稿のときにも引用したペリー艦隊日本

遠征記のおかげで、当時の神子元島の位置付けや周囲の状況がよく理解できました。また灯台の建設記録が豊富にあるのは、当時それだけ注目されていたことを証明しているかのようでした。現場の詳細な様子が記された「菅谷十兵衛」の工事日誌は秀逸です。このような超一級の歴史資料が、近年各地で発見されていることから、灯台に関する知られざる歴史資料も、まだまだ多くが各地で埋もれているように思えてなりません。

2話目は、先ず疑惑の三條実美の灯台点灯の日の訪問です。拙稿を始める前、一年以上に及んだこの疑惑の調査が、灯台研究生の基礎を作り上げました。この疑惑と出会わなければ、灯台研究生は存在していません。神子元島灯台は、灯台研究生の生みの親です。岩だらけの神子元島で、お雇い外人教授方と日本人見習いとやりとりは、想像するだけでも愉快です。拙稿を書いた当時は、自動翻訳機は、高価な割にはまだまだ使えない物でしたが、今ではスマホで使える身近な存在となっています。あれから10年も経っていませんが、急激な進歩を感じずにはられません。

3話目は、ずっと気になっていた灯台気象観測についてです。本国イギリスで行われていない灯台での気象観測を、なぜブラントンは最新の気象観測器まで設

置して点灯開始時から行わせたのか？ブラントンは観測データを、当時の日本の最重要情報として秘かに本国へ送り続け、その背景には大英帝国の野望が隠れているのではないかと、大胆な推理をしましたが、実際のところは、ブラントンを派遣した気象学者でもあったスチーブンソン氏が、極東アジアの日本の気象データを調査分析したく、そのデータ収集であったと考えるのが妥当な線ではないでしょうか。

古川喜義様とのあの時の出会い、今振り返ると、最後のチャンスだったと思われまます。勇気を出して、



お雇い外人教授方が居た頃の神子元島灯台  
(ウォー Copp 旧蔵写真帖横浜開港資料館蔵より)

最初の手紙を書いたこと、本人から直接電話を受けたことが、ついこの前のように思われます。それらひとつひとつの貴重な経験が、4編に亘る神子元島灯台の拙稿を作り上げています。

最後の4話は、若山牧水来島の話、おすみさんの逸話、貞明皇后さまと戦災記録、そして心柱と続く様は、最後に全部出し尽くそうとの意気込みが感じられます。振り返ると、愚生が一番思入れのある灯台、且つ思い出も一番多い灯台が神子元島灯台のように実感しました。

これが拙稿の最後と覚悟を決めて書いた神子元島灯台のラストには、これで終りだとは書いていません。神子元島灯台の4編を書き終えた時、またいつの日か書けるかもしれないと、淡い期待と終りにさせたくない思いが、心の奥底にあったのは間違いありません。

#### 番外編 伊江島灯台の秘録

(2014年8月号、9月号)

1年以上のブランクを経て、伊江島灯台の番外編からの再開でした。この年の4月、沖縄を異動となり、次の勤務地は、なんと下田海上保安部、神子元島灯台を管理する部署でした。神子元島灯台の拙稿の最後に

は、いつの日か又、神子元島灯台を調査したいと書いていますが、勤務の希望調書には、希望地に下田と書いたことは一度もありません。

拙稿は灯台研究生の備忘録です。そのとき新たに分かったこと、知られざる記録の在りか、自分が感じたことを忘れないようにまとめ、今後の自分にも他の誰かにも参考になるようにとの思いで、この今を書き留めている日記のような感じが強くあります。伊江島灯台の秘録は、まさにその思いが高じて、閉じた思いと眠らせた感覚が覚醒され、一気に書き上げています。

前編は、明治30年代の灯台での勤務の詳細と灯台の実態を、伊江島灯台の当直日誌から読み解きました。想像以上の報告文書の多さや日本一の灯台の信じ難い惨状が記され、日本の灯台史の黄金期の陰の部分を見聞したようで、二つの大戦に勝利し勢いづく明治の世の光と陰を見ているようでした。これらの驚愕の事実、灯台史への大いなる興味を与えてくれます。

後編は、記録資料を深掘りし、伊江島灯台での生活の知られざる事実など、全く予想もしない展開となっています。これらの事実を頭に詰め込み、沖繩を離れる2日前に、伊江島で伊江島灯台の講演を行うこととなり、島の人から灯台の新たな事実も知ることになり

ました。講演会を企画された新垣幸子様との最初の出会いは、沖繩赴任の3年前でした。そのとき伊江島灯台の記録資料の存在も始めて知り、その後沖繩に導かれていきました。記録資料が、最後の灯台長 田中吉樹様と深く関係していることに気付いたとき、自分が沖繩に来ることは定められた運命だったように感じました。拙稿の最後の一文は何度読み返しても、恥ずかしながら今も目が潤んで仕方ありません。

#### 50 曾津高埼灯台（2014年10月号）

奄美の曾津高埼灯台を訪問したのは、沖繩を離れる直前の平成26（2014）年2月。沖繩の年季明けを予見し、佐多岬灯台訪問時にお世話になった茅野徹志様（拙稿ではK様）に再度お願いし、同灯台及び西古見地区を案内していただきました。佐多岬同様、こんな所に本当に人が住んでいたのか、しかも子供が学校に通っていたのかという強烈な印象が今も残っています。

4月の下田へ異動後、偶然手にした「臨時台湾灯標建設部の報告書」との出逢いが、この拙稿を書くことを決定づけました。2月の訪問時、判然としなかった当時の灯台、官舎、門、貯水所等の配置及び多くの疑

間が、完全に網羅されており、この資料の存在は公表すべきだと思いつたのが拙稿再開の動機です。同書にある灯台の図は、拙稿の末尾一面に掲載していただき、前回の伊江島、次の犬吠埼にも使用し、再開した拙稿の陰の心強い存在でした。今振り返ると、同書とのタイムリーな出逢いが、拙稿を後押しし、継続させてくれたようです。

その後、何度も茅野様から連絡をいただきましたが、レンズの行方はまだつかめていません。沖繩津堅島灯台(41話)と合わせて、行方不明の疎開レンズの探索は、これからも続きそうです。

51 犬吠埼灯台(2014年11月号、

2015年5月号、2016年5月号)

神子元島灯台の次に長い3編に分けた長編です。途中に次の祿剛埼灯台を書いており、完成までに1年半近くを要しました。

1話目は、条約灯台が15個の中から10個が選ばれ、漏れた5個の中に犬吠埼があったこと、アメリカ公使が要望していたことなど、条約灯台から始めました。漏れた5個の中のパルラスロックが、肥前島であることを探し回った作業が大変だったことを記憶してい

ます。次に取り上げた中澤孝政とブラントンの確執の種は、輸入レンガの採用の是非ではなく、レンガの二重壁構造の採用の是非ではなかったのかとの愚説は、拙稿を書いた後、御前埼灯台も二重壁であることが判明したため、この愚説は撤回します。犬吠埼灯台起工時の明治5年には、各地でレンガが生産され、レンガ造の建物が次々と造られていることから、実際のところは、ブラントンが認めた実績のある工場製のレンガか、現地で新規に製造する保証のないレンガの採用の是非が、確執の種だったのではないかとの愚説に改めます。

2話目は、明治40年代、船舶通報業務の開始、灯器の変更、霧笛の設置、そして嘉仁皇太子(大正天皇)の行啓の華々しい光と陰を記録から読み解きました。過度な行啓の準備は、航路標識事務所時代の視察や要人來所前、灯台や事務所を細部まで清掃し磨き上げていたことを思い出しました。今となっては考えられない時間と労力をかけて皆で準備していたことは、灯台の受け継がれていた伝統だったように思われます。鉄塔の塗装も同じです。灯台の保守に危険作業は付き物。安全や効率性を重視する現在、「昔はそんなこと当たり前だった」なんて、皆の前で大見得切れば、危険作

業を強要していると。パワハラで訴えられかねませんね。

3話目は、初代レンズが歴代の天皇がご覧になられた栄えあるレンズであることを紹介しました。明治天皇が目にした試験灯台設置時の赤青白のトリコロールの灯光は、さぞ美しかったものと想像されます。

犬吠埼灯台は、多くの皇室の方々が訪れた記録が残されています。当時、銚子の人々から御用邸と呼ばれた灯台近くにあった伏見宮の別邸瑞鶴荘の存在が大きなる理由の一つでした。平成26(2014)年7月、銚子市で、点灯140周年の記念講演会が行われ、愚生も講演させていただき、この事実を紹介いたしました。その講演後の懇親会の中で、「皇室に愛された灯台」というフレーズを思いました。この講演会がトリガーとなり、拙稿51話目に犬吠埼灯台を書いた次第です。

講演会を主催した犬吠埼ブランドン会の仲田博史様には、これまでに多くのご援助と激励をいただいております。灯台研究生の良き理解者であり、何物にも代えがたい大きな存在となっております。これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

## 52 禄剛埼灯台(2015年9月号)

禄剛埼灯台を訪れたのは、拙稿を書く前年の11月、当時七尾保安部の交通課長であった藤本正人様に案内いただき見学させていただきました。翌年、NHKの朝ドラ「まれ」のオープニングに禄剛埼灯台の空撮が毎日流れており、それに刺激され、犬吠埼を書いていく途中でしたが、放映中に書いておこうと、飛び込みで急ぎまとめた記憶があります。

記念額の菊の紋の謎は、今も解明できていません。その後、四国の室戸岬灯台にも、入口の頭上に半分の菊のデザインが施されているのを確認していますが、こちらも意図が判然としません。記念額自体、西洋の灯台には見られないもので、なぜ日本の灯台にだ



室戸岬灯台入口の菊のデザイン  
(令和元年11月撮影)

け最初期から取り付けられたのかは、幕府と明治政府、英仏の対立が招いたものとの愚説を記しましたが、真相は如何でしょうか。

次に取り上げた燈籠や玻璃板骨子の違いについては、それぞれに理由があることを知れば、古い灯台を見る楽しみが増えると思われれます。各地の灯台の中に残る木目塗りや伝声管など、それらを知ることにより、灯台の見方が変わるはずで。

木目塗りは、日本の灯台の文化だと思われれます。器用で繊細な筆遣いは、世界に誇れる日本人の特質を再認識できます。西洋の灯台には見られない、後世に残すべき日本の灯台の遺産だと強く思われれます。

#### 番外編 八尾島（パルミド）灯台

（2016年11月号、2017年1月号）

娘との約束の韓国旅行、その怪我の功名とまでは言いませんが、その旅行がなければ、書くことはなかった日本人が設置した明治期の韓国の灯台の話です。

韓国最初期の灯台設置は、日本と同じ様相です。外圧による貿易に関する条約のもと、イギリス人により進められていきます。その政策に、日本とイギリスの熾烈な争いが繰り広げられます。日露戦争で勢いを増

す日本に屈服し、イギリスは韓国を去り、以降は日本が朝鮮半島全土の灯台政策を、戦後までの長期間推進めます。

愚生の八尾島灯台の訪問は、韓国の方々の温かいご支援により、思いもよらぬ展開になりました。政治的には日韓の関係は冷え切っていますが、韓国の人々は皆温かい心情を持ち、その熱い思いは誰からも感じられました。拙稿を読み返すと、八尾島灯台のことより、人々との交流の思い出が強くよみがえります。

日本の明治期灯台は、韓国、台湾の灯台へもつながっていきます。日本の灯台史の研究において、両国の灯台史の探求は避けて通れぬ道です。八尾島灯台もまだまだ多くの謎が残ったままです。日本人が携わったアジア諸国の灯台については、今後も機会を設けて、取り組みたいと考えています。

#### 53 宗谷岬灯台（2017年3月号）

三篇の北海道の灯台が続きます。灯台を訪ねたのは、その4年前、沖縄勤務時の拙稿を辞めようと決めた時でした。夏期休暇中の千葉へ帰宅した際、過去に調べた北海道の灯台の資料・写真をかき集め、灯台だけを駆け巡る旅でした。南国沖縄から北の大地へ思い切っ

て行けたのは、拙稿を辞めると決め、灯台史探究に思い残すことがないよう、後悔しないよう見ておこうとの焦るような思いからでした。数ある北海道の灯台の中で、最初に宗谷岬を選んだのは、最果ての地であることと、吊るされた霧鐘が写る初代宗谷岬灯台の絵葉書に魅了されていたからです。

初代宗谷岬灯台は、霧鐘も含め、灯台の鉄材は総て、横浜の燈台局工場で製造されたものでした。その過程が詳細に記された官報の燈台局報告は、他にはない貴重な灯台の歴史記録です。書くつもりはなかった北海道の灯台を、このとき書いたのは、官報の燈台局報告を引用し書き上げた52話の碌剛埼の拙稿に触発されたものでした。

初代の灯台は、明治44年の山火事の延焼で焼失しています。焼け残ったレンズは、横浜燈台局の工場で職員が磨き上げ、大正9年に能登の猿山岬灯台に転用され、80年以上も長く使用されました。灯台から撤去後は近くの道の駅にて展示され、愚生が沖繩赴任前の平成21年に訪れた際には、お土産売り場の真中に平然と鎮座している光景に啞然としたことを覚えています。令和の現在、同レンズはガラス張りの専用の場所に移され、大事に保管展示されているようです。

拙稿を書いた当時、平成が終ると報道され始めた頃で、明治という時代がさらに遠くに感じられ、明治の灯台のすべてが、何物にも代えがたい貴重なものであると痛感してきた頃でした。

#### 54 葛登支岬灯台（2017年7月号、9月号）

前回同様、官報の燈台局報告から、灯台設置の過程を追っていきました。灯台が、日本唯一の木造と鉄造を融合したハイブリッド構造だったこと、同時期に建設された宗谷岬灯台に比べ、規模が比較にならない程小さいのに、宗谷岬より長期の工事期間を有したこと、点灯開始が真冬となった意外な理由などが、同報告から明らかになりました。

後編は、灯台研究生という名前を少し意識して、葛登支岬灯台の明暗光フレネルレンズの機能と開発者について深く掘り込みました。この日本唯一の珍しいレンズは、世界的にもほとんど残されていないことが分かりました。現在、日本ではブレブネル式レンズと呼ばれています。開発したとされるアランプレブネルと同レンズを結びつける本国イギリスの資料がないことも判明しました。

灯台のレンズを見ても、職業上感動することはあり

ませんが、生涯2回だけです、フランスの灯台博物館で見た多面フレネルレンズと、この葛登支岬灯台の明暗光フレネルレンズは、目にした時の衝撃は今も忘れられません。

## 55 稲穂岬灯台（2017年11月号）

古いものが何も残されていない稲穂岬灯台を訪問地を選んでのは、命の水の記事に感銘を受け、いつか必ずこの井戸を見に行こうと決めていたからです。期待して訪ねてみれば、信じられない光景が広がっていました。平成5年の北海道南西沖地震で、井戸があった稲穂地区は津波で流され、何の痕跡もなく原野になっていました。それでも諦めきれず、冷たい雨の降る中、何かないかと生い茂る夏草の中を暗くなるまで探し回った体験は、拙稿に書いたとおり愚生に様々な教訓を与えてくれました。そんな中、井戸のことを一番知っていた水野様と偶然巡り会えたのは、今でも奇跡としか思えません。水野様に出会えなかったら、何も分らず何も得る物もなく、確認不足の後悔だけの訪問で、拙稿を書くこともなかったはずです。

この拙稿の後、番外編を2編書いて、約2年のブランクがあります。様々な理由で書くことができず、こ

の稲穂岬の拙稿は、そのブランク期間に何度も読み返しています。この拙稿のラストは、FM東京の毎週楽しみに聴いていた番組の最終回を聴きながら、切ない思いで書いています。今、振り返ると、その時のことが思い出され、愚生にとって稲穂岬灯台は、灯台訪問時の淡い思い出よりも、拙稿の最後を書いたときの切ない思いと何度も読み返していたことが、今では強心に焼き付いています。

## 番外編 燈台寮発掘調査報告（2018年1月号）

拙稿を見直して、前後編でなかったのが不思議に感じたり、調査期間が長期間に及び調査量も膨大でした。横浜に勤務当初からずっと気になっていた燈台局跡地での横浜新市庁舎建設工事。横浜勤務2年目の春、意を決して工事事務所を訪ね、発掘調査を担当した横浜市埋蔵文化財センターの鹿島保宏様を紹介いただき、知られざる燈台寮の姿を目にすることができました。

この調査を通して、燈台寮が出来る以前の弁天社の時代まで深く掘り下げてみました。通勤時には、絵図の弁天社のあたりまで遠回りし、当時の様子をあれこれ回想して楽しんでいました。

発掘されたレンガ・陶製の排水管に興味を抱き、それを訊ねるため、横浜歴史資産調査会理事の堀勇良先生に、この機会に初めてお会いすることができました。先生は、ブランドン研究の第一人者でもあり、かねてから拙稿にアドバイスをいただいております。明治期以前の馬蹄形のレンガ排水管は、先生の報告書にも見当たらず、確認のためお見せした際、それまで饒舌だった先生が、暫し押し黙って写真を凝視していた姿が忘れられません。その後、他の先生方も交えて、中華街のいつものお店でお会いできたことは、灯台研究生の得難き財産となっています。

この調査の途中から、もうひとつ気になっていた横浜標識製作所についても並行して調べており、この拙稿を書いた後、横浜を離れるまで同調査に専従しました。その日々が、横浜を異動する5日前の神奈川新聞で紹介されたことは、生涯忘れられない出来事となりました。

## 56 大濱灯台（2019年7月号）

福井の敦賀勤務を経て、四国愛媛の来島海峡海上交通センターへ異動となり、赴任してまだ間もない頃に、職場の目の前にある大濱灯台跡を見に行きました。灯

台が廃止されて半世紀以上が過ぎているのに、設置時の写真にある門柱やレンガ塀が、そのまま残されていたのには驚きました。5月の連休明け、その事実を、地元の有識者が募るしまなみ海道周辺を守り育てる会の村越定信会長と地域史研究家の大成経凡氏に話す機会がありました。強い興味を示し、7月には地元の公民館で、大濱灯台に関する講演会を、守る会とセンタ―の共催で開くことになりました。この拙稿は、その講演資料と並行し作成したものです。拙稿の中で、開催前の講演会の案内を載せたのは、聴講者を一人でも呼びたい切実な思いからでした。大濱灯台は、昭和38年の廃止撤去から56年も経っており、半世紀以上前の灯台の話にどれだけの人が来てくれるのか、人が来ない淋しい講演会になってしまうか不安な気持ちでいっぱいでした。しかし当日は、会場を埋め尽くす97名の地元のお若男女の方々が訪れ、大盛況でした。講演後は、聴講者から灯台の思い出を語っていただいたり、講演の中で紹介した子孫の方が名乗り出たり、廃止後何年経っても、地元で愛されていた灯台であることが分かり、その様子は愛媛新聞にも大きく取り上げられました。

灯台を保守管理する私達海上保安官は、各所の灯台

を管理標識として数年だけ点検保守を行い、また他の場所への異動を繰り返しています。長年、その灯台を日にし、その人の過ごしてきた日々とともにあった地域の灯台は、その人達にとってはかけがえのない存在です。灯台の見方、捉え方が私達とは大きく異なるのは当然です。灯台への愛着や思いは、地域を短期間で異動しながら交通課の一業務として灯台の保守管理を行っている私達とは、全く違う次元のものです。講演会の会場で感じた熱気や、聴講者の方々からの想定外の反応は、それを証明しているかのようでした。灯台を介しての地域連携と観光支援が現在、海上保安庁の新たな取組みとされていますが、互いの相違点から、一業務として行うことの危うさが秘めているようにも感じられました。

### 57 大下島灯台（2019年9月号）

3編の三原瀬戸の灯台の話が続きます。三原瀬戸の8基の灯台は、明治27年5月に一齐に点灯開始している異例の灯台です。センターに赴任した最初の週末、引越し荷物もそのまま、桜が満開の大浜崎、高根島の両灯台を、翌週には定期船で大下島灯台を訪ねました。

大成経凡氏から、地元愛媛の明治の南海新聞には、三原瀬戸の灯台設置に関する記事はないことを聞き、広島県の広島県立文書館に赴き、当時の中国新聞と芸予日日新聞の二誌の記事を2日間徹底的に調べました。

しかし、ここにも設置に関する工事記録はなく、分かったのは、当時の記録を見る限り、灯台の設置が山陽鉄道の開通や日清戦争には関与していないということでした。両誌にも出ていた、灯台の工事を開始した明治26年11月に、日本初の遠洋定期航路として開始した神戸ーインド間の綿花取引の定期航路が、灯台設置の理由と、拙稿では結論付けました。大成氏からその後、同見解に賛同いただき、この綿花の安定した供給が、東洋のマンチェスターと呼ばれた大阪の発展に寄与し、日本の明治期の経済を支えていくことになるとの玉稿がまとめられています。

大成氏とは5月に会って以降、定期的な懇親を繰り返しており、前記の新聞情報のほか、灯台レンズの行方や映画の情報など、地域の灯台の耳寄りな情報をいただいております。大下島灯台を三原瀬戸の灯台の拙稿の最初に書いたのは、嘘を愛する女の映画を見て、大下島に再度渡島し、レンズに出逢えたことが一番の決め手でした。

拙稿の中にある島の幽霊の燈光記事の掲載は、平成9年ではなく昭和9年の間違いです。

## 58 大久野島灯台（2019年11月号）

愛媛に来てから、晴れた休みの日には、敦賀の一年のブランクを取り戻す如く、各地の灯台を駆け巡りました。大久野島灯台を訪ねたのは、6月末でしたが、4月には高松の四国村にて、移設された初代大久野島灯台を目にしました。そのとき目に飛び込んできたのが、灯台入口の支柱と楣石（まゑいし）でした。敦賀の立石岬灯台（明治14年）で目に留まり気になっていた支柱（トスカナ式オーダー）を思い出させ、それを機に、灯台表面の石の加工（仕上げ）の探求に及び、今治市大島の石材採掘場へ足を運び、大成氏の紹介で同所の大御所から石材加工について教わりました。

大久野島では、官舎跡周囲に残る大量の光沢のある瓦に圧倒されました。今治市の伝統的な菊間瓦であることが分かり、かわら館をはじめ今治市菊間町に通い、約1ヶ月近く瓦ばかり調べていました。夏の帰省時には、車窓から見える各地域の瓦屋根ばかりが目に入り、様々な屋根瓦を眺め楽しみました。その感性はまだ少し顕在のようで、特徴的な瓦には今も敏感に反応しま

す。

大久野島を地図から消えた島と、ネットで出ていたフレーズを引用しましたが、軍事施設がある地域は当時、地図から消されるのは当然で、日本各地で多くの関連地域が地図から抹消されており、大久野島だけできなかったことを、この場を借りて申し添えます。

## 59 高根島灯台（2020年3月号）

高根島灯台は、愚生には桜の園の印象が強過ぎます。目にした時の衝撃は、拙稿にも書いたとおり、写真を撮りまくり、その1枚がこの拙稿が掲載の表紙に使っていたきました。桜の木は、島の小学校の廃校の記念に生徒らが植えたものだど、その場で聞かされ、そのことが忘れられず、夏が過ぎた頃、再び灯台に向かいました。その帰路に、廃校の小学校を探し、同所に居合わせたのが、記念誌を貸していただいた横村廣郎様で、その偶然の出会いから桜の植樹の全貌を知ることになりました。

ここだけの話ですが、高根島灯台がなぜ灯台50選に選ばれたのか？50選の公募があったとき、全島民あげて高根島灯台が選ばれるよう応募したとの秘話を、横村様からこっそり教えていただきました。小さな島の

小さな灯台ですが、島が一致団結し、日本を代表する灯台にしていたのです。大濱灯台の講演会のときにも感じた、私達が考えている以上に灯台に対する地域の人達の熱く寄せる思いを、また感じずにはいられませんでした。

三原瀬戸8灯台の図と写真を横一列に並べた資料は、その前年の灯台記念日に、広島で行われた第六管海上保安本部交通部主催の祝賀会の講演用に作成したものです。拙稿の三原瀬戸8灯台の魅力の話も、そのとき披露し、好評をいただきました。

#### 60 安芸白石灯標（2020年7月号）

本来は、屋形石、安芸白石灯標の順番で拙稿を書いており、5月号に屋形石、7月号に安芸白石灯標が掲載される予定でした。しかし、5月号がコロナ禍により休刊となったため、掲載の順番を、安芸白石灯標を先にしてもらいました。同稿の半分が広島原爆に関する記事のため、伊藤武夫氏家族と山口正夫氏への鎮魂の思いを込め、なんとか8月の原爆記念日前に掲載したいとの願望から、掲載を逆にしていただきました。その被爆死の記事は、前編で記したとおり36話の出雲日御碕の後編で没になったものです。中国新聞の畑矢

様の記事が、実際に見てきたようで、あまりにも内容が具体的過ぎとの理由でそのときは採用されませんでした。それから10年後、まさか畑矢様にお会いし、取材秘話が聞けるとは思いもしませんでした。屋宜隆次長（当時）を介しての広島での懇親で、失礼とは承知しながら、愚生も感じていたリアル過ぎる内容に関して、畑矢様に直接問い掛けると、膨大な関係資料の収集と各地への当事者への直接取材など、記事は簡単には書けなかった苦労談を聞くことが出来、その証言をもって、再度拙稿に復活させました。六管区への異動と畑矢様との懇親がなければ、安芸白石灯標の拙稿は恐らく書いてなかったものと思われず。

この長編の拙稿は、コロナ禍で日本全土が外出自粛した今年のゴールデンウィークに一気に書き上げました。この時期に集中して書けたのも、没記事の10年後の復活も、偶然ではなく何か必然のように感じるのは、考え過ぎでしょうか。

#### 61 屋形石灯標（2020年9月号）

この振り返りを書いている7月現在、同稿は燈光にはまだ掲載されていません。内容の変更があるかもしれませんが、最後に記した須沢氏の殉職の話は、同稿

からは切り離せないと考えています。屋形石の拙稿を書こうと決めたとき、この事実を愚生は、全く知りませんでした。同事実を知ってから、広島の航標所に勤務された職員を探し、同事実について尋ねてみましたが、誰も明解に答えられる方は居られませんでした。また、現在の広島海上保安部交通課にも、同事実は伝えられていませんでした。第六管区では近年、殉職事故が相次ぎ、事故を忘れぬようにと、発生した日には各所で追悼行事が行われ、他管区に比べ安全に対する意識が非常に高く感じられます。

灯台の長い歴史に於いては、数えきれない多くの殉職事故が見られます。危険を顧みず単独で夜の海に飛び込んだ須沢氏の行動は、安全第一の観点からは容認できませんが、命をかけて灯火を守ろうとしたその思いは、何物にも勝る尊いものであるということは、時代がどんなに経とうとも、忘れてはいけな**い**と思っております。

番外編も含め61話に至った明治の灯台の話は、書き始めた2004年から16年となりました。何度もやめようとしては、また奮起して長々と書いております。どこまで書き続けるのか、先は全く見えませんが、書

けるところまで、書いていこうと思っております。

(30)から(61)までを振り返り(後編) 終り



春のしまなみ海道 高根島灯台の桜花

## 明治の灯台の話（30～61）

No.	タイトル	掲載号	サブタイトル
30	横浜東・北水堤灯台	2009 (H21). 05	三大港の灯台
31	天保山・大阪南北突堤灯台	2009 (H21). 06/07	
32	和田岬灯台	2009 (H21). 08・09	
33	入道埼灯台	2009 (H21). 10	日本海の4灯台
34	経ヶ岬灯台	2009 (H21). 12	
35	美保関灯台	2010 (H22). 01・02	
36	出雲日御碕灯台	2010 (H22). 03 ・2011 (H23). 01	
37	水ノ子島灯台	2010 (H22). 05・08	大分の3灯台
38	姫島灯台	2011 (H23). 02・03	
39	関埼灯台	2011 (H23). 04	
40	三重城灯台	2011 (H23). 05	沖縄の2灯台
41	津堅島灯台	2011 (H23). 06/07	
42	釣掛埼灯台	2011 (H23). 08	南九州の2灯台
43	鞍埼灯台	2011 (H23). 09・10	
44	六連島灯台	2011 (H23). 11	
45	部埼灯台	2012 (H24). 01	関門海峡の3灯台
46	白洲灯台	2012 (H24). 02	
47	佐多岬灯台	2012 (H24). 03・04	南九州の2灯台
48	屋久島灯台	2012 (H24). 06/07・08	
49	神子元島灯台	2012 (H24). 09・10 ・2013 (H25). 05・08	日本を代表する灯台
番外3	伊江島灯台の秘録	2014 (H26). 08・09	沖縄の灯台の秘録
50	曾津高埼灯台	2014 (H26). 10	奄美大島の灯台
51	犬吠埼灯台	2014 (H26). 11・2015 (H27). 05・2016. 05	日本を代表する灯台
52	禄剛埼灯台	2015 (H27). 09	日本海の灯台
番外4	八尾島（パルミド）灯台	2016 (H28). 11 ・2017 (H29). 01	韓国の灯台
53	宗谷岬灯台	2017 (H29). 03	北海道の3灯台
54	葛登支岬灯台	2017 (H29). 07・09	
55	稲穂埼灯台	2017 (H29). 11	
番外5	燈台寮発掘調査報告	2018 (H30). 01	横浜燈台寮
56	大濱灯台	2019 (R01). 07	四国の灯台
57	木下島灯台	2019 (R01). 09	三原瀬戸の3灯台
58	大久野島灯台	2019 (R01). 11	
59	高根島灯台	2020 (R02). 03	
60	安芸白石灯標	2020 (R02). 07	広島湾の灯標
61	屋形石灯標	2020 (R02). 09	

# 令和元年「燈光」7月号

## 『曾津高埼灯台』との出会い（その5）を読んで

和田 建一郎

私の父和田秀夫は、昭和28年12月に奄美大島が復帰、翌年7月の転勤で初代の名瀬港航路標識事務所長として赴任、当時は、事務所も官舎もできていなかったため、私たち家族は父の郷里（鹿児島県）の小中学校で2学期・3学期を過ごし、昭和30年4月に名瀬の新しい官舎に移動しました。それから昭和33年7月に父が細島港航路標識事務所（宮崎県日向市）に転勤するまでの3年4か月を、家族とともに名瀬での楽しい時間を過ごしました。

そうした私の思い出とは異なる内容の記事が、令和元年7月5日発行の「燈光」7月号に普通会員の岩尾亮二氏による『曾津高埼灯台』との出会い（その5）の寄稿文の中にあることを知りました。その寄稿文で、私と私の父の事に触れています。一点だけ誤解を招く表現がありますので、この紙面をお借りして私の真意を述べさせていただきますと思います。その部分は、42頁下段の「私の親父はよく言っていた、左遷されて

奄美大島に来た」という箇所です。

この寄稿文のとは、私と岩尾氏とが8年くらい前に熊本県八代市でたまたまお会いする機会があり、岩尾氏が私の父の30年ぐらい後に名瀬海上保安部の灯台課に勤務されたと同じ、その奇遇にびっくりしました。その時、私が岩尾氏へ奄美復興後の4年間の思い出などを話している中で、「左遷させられて奄美大島に来た」と父が言ったように誤って受け取られてしまったようです。私の記憶では、そのように言った覚えもなく、また、父からもそのようなことを聞かされたこともありませんでした。父は、初代の名瀬港航路標識事務所長として、使命感をもって勤務し、私たち家族も温かく迎え入れてくれた奄美の人々に感謝しておりました。

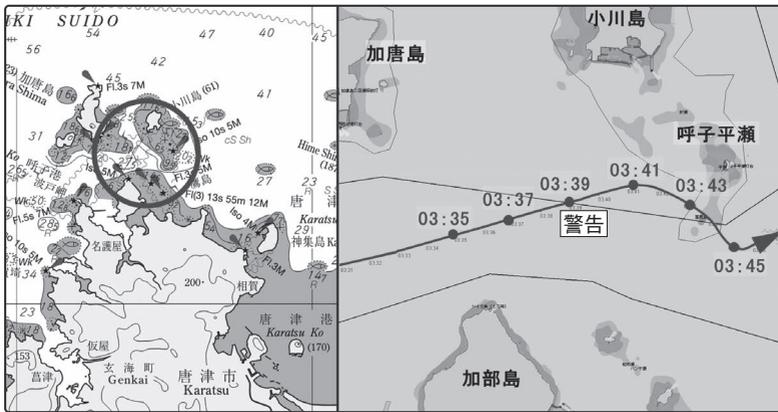
会員にとって貴重な紙面であることは承知の上ですが、今は亡き父の子として、この文を寄稿させていただきます。

佐賀県呼子沖で貨物船の  
 乗揚げを回避  
 ～迅速・確実に注意喚起～

関門海峡海上交通センターは、11月11日、午前3時39分、佐賀県呼子沖で、運用管制官が貨物船の乗揚げを回避させました。

熊本県の八代港から阪神港堺区に向けて佐賀県の呼子沖を東航する貨物船（日本国籍、295トン、喫水3メートル、4名乗組）が避險線を通過、乗揚げ防止注意喚起のAISメッセージを自動送信しました。

瀧津運用管制官は、呼子平瀬への乗揚げまで残り約5分しかないことから、



航跡図

迅速・確実な注意喚起が必要と判断し、船舶電話で貨物船に浅瀬への乗揚げの危険を知らせる警告を行いました。

その結果、貨物船は約2分後に変針を開始し浅瀬への乗揚げを無事に回避し東航しました。

冷静な判断と迅速な対応で乗揚げを回避させたことで、12月16日、瀧津運用管制官は、所長褒賞を受賞しました。関門海峡海上交通センターは、海上交通の安全に努めます。

（関門海峡海上交通センター）



所長褒賞受賞

## 初任運用管制官研修(その2)

### ～経験と知識の拡充～

関門海峡海上交通センターでは、昨春に着任し、運用者資格を取得した海上保安学校管制課程卒業業者や初任運用管制官らの様々な経験と知識を更に拡充させるため、昨年10月から初任運用管制官研修を行っています。運用管制業務は、レーダーなどを使用して船舶の動静を確認し、安全航行に必要な情報を個別の船舶に国際VHF無線電話などで提供して船舶事故を防止します。このため、通常の交代制勤務では、職場外の海の現場に臨場することは有りません。しかし、運用管制官そして海上保安官として将来を見据えた素養の確立のためには海の様々な現場を知ることが不可欠です。

#### ▼ 若松港内交通管制室業務見学

12月10日

#### ▼ ひびきコンテナターミナル業務 見学

12月10日



ひびきコンテナターミナル業務見学



若松港内交通管制室業務見学



関門水先区水先人と操船シミュレーターを使用した合同訓練

#### ▼ 関門水先区水先人と操船シミュレーターを使用した合同訓練

12月22日、24日  
関門海峡海上交通センターは引き続き人材育成に努めます。

(関門海峡海上交通センター)

# 呉海上保安部管内の 灯台の思い出、教えてください

呉海上保安部交通課

呉海上保安部では、灯台等航路標識の思い出を後世に残すため、みなさんの灯台等にまつわる思い出の話や写真を募集しています。

心に残っている風景、大切な人と訪れた思い出、夏の巡回の思い出、建設に携わった話、ご両親等から伝え聴いた思い出の話等：どんなことでも構いませんので、ぜひ素敵な思い出を教えてください。

## 1 必要事項

- ① 思い出の灯台  
(灯台名が分からない場合、〇〇港の〇色の灯台)
- ② 思い出の時期、内容、写真など
- ③ その他(灯台への要望やメッセージなどあれば)

## 2 対象の灯台等

呉海上保安部管内の灯台等(呉市、竹原市、江田島市の一部、東広島市及び大崎上島町)

詳細は呉海上保安部ホームページをご確認いただくか、お電話にてお問い合わせください。

## 3 応募期間

令和3年8月末まで

## 4 応募方法

あなたのお名前、郵便番号、住所、年齢、電話番号を明記の上、次のいずれかの方法によりご応募ください。

(1) 郵送 〒737-0029 広島県呉市宝町9-25

呉海上保安部交通課「灯台の思い出」宛

(2) ファックス 0823-26-0116

(3) メール [jckure-toudainoimide@mlt.go.jp](mailto:jckure-toudainoimide@mlt.go.jp)

件名に「灯台の思い出応募」と記入し、本文に必要事項をご記入ください。

## 5 お問い合わせ先

呉海上保安部交通課 電話：0823-22-0999



中ノ鼻灯台



呉海上保安部  
ホームページ

昭和三十一年三月二十五日  
第三種郵便物認可  
（隔月一回五日発行）

「燈光」

三月号 第六十六卷 第二号

